

## 京都府都市農業振興アクションプランに係る政策検討会議（第2回） 議事要旨

### 1 日 時

平成30年8月9日(木) 13:30~15:30

### 2 場 所

ホテルルビノ京都堀川 アムールの間

### 3 議 事 <◎：座長、○：委員、●：事務局、◇ゲストスピーカー>

#### (1) 第1回検討会議のまとめ(確認)

- ◎ 京都府における都市農業の対象をどう規定するか。
  - 市町村も地方計画を策定することができることから、京都府としては市街地及びその周辺で行われる農業を基本として、都市計画区域を有する市町村すべてをアクションプランの対象としたい。
- ◎ 法律の条文に則って、「市街地及びその周辺の地域において行われる農業」を対象とすることです。

#### (2) 話題提供

##### ① 「体験農園を通じた都市住民と農業の交流」

(農業体験農園「すこやかファームおとわ」 溝川 長雄 氏)

- ・ 農地の相続を受けた際に、農地の活用方法を検討。体験農園に関するセミナーを受講して興味を持ち、約10年前に農業体験農園を開設。
- ・ 開設当初より、募集人数を大幅に上回る応募があった。はじめの数年はやりがいを感じて取り組んでいたが、継続や普及を考えると農業経営も意識する必要がでてきた。自分のできる範囲で、入園者の満足度向上に努めている。
- ・ 「都市農業振興基本法」が制定され、都市農業は耕作する農地から利用する農地の役割も有することになった。これを機に、制度改正や支援拡大を期待するが、そのためには行政と一緒にあって取り組む必要がある。また、都市農地を農地として、どう資産活用するべきか考える必要がある。
- ・ 農業体験をした人は、農業全体に興味を持ち、自分に何かできるのでは、と考えるようになる。
- ・ 仲間を募って、市周辺の農地(市街化農地)に中学校区単位で拠点づくりを進めたい。
- ・ 「都市農地の貸借の円滑化に関する法律」の制定により、生産緑地の貸借が可能になれば、開設者が知識や技術を十分に有していない市民農園が増加する。すると、適正な農地の維持や管理ができないほ場が発生する可能性が出てくるため、行政による支

援や指導が重要になってくる。

## ② 「振り売りによる消費者への直接販売の取組」

(G g' s 角谷 香織 氏)

- 京都には昔から、農家が大八車（今は軽トラック）に野菜を積んで、各家庭や飲食店に販売していた歴史がある。信頼関係の上に成り立つ販売方法が、京野菜文化を育ててきた。
- 自身は非農家であったが、大学卒業後に野菜に興味を持った際、京都には近くに農地がたくさんあることに気づいた。その後、上賀茂の農家を手伝いながらSNSで発信しているうちに、情報を見た人の中から農業に興味を持つ人が現れ、そのような人たちが農家の農産物を販売するために振り売りの取組を開始した。
- もっとも大切にしていることは、「農家のことを知りながら販売すること」。大きな流通にはならないが、農家情報を伝える努力をしている。「誰から買うか」は重要なポイント。
- 京都市という土地柄や文化的な要因があるのかもしれないが、歩いて供給できる距離に畑があるため、都市へのアクセスが容易で農家と情報等を共有しやすい。また、鮮度を保ったまま販売することが可能であることから、振り売りは合理的な販売方法である。
- 振り売りは、客の意見や声が農家に届くことで農家の技術向上につながっている。振り売りを文化として残していくため、自分以外にも取組が拡大すればよいと考える。
- これまで振り売りから購入したことがない若い世代の人たちにも広げるため、マンションなどでの販売（マルシェ）もできたらいいなと考えている。

## ③ 「京都市伏見区久我・久我の杜・羽束師地域 まちづくりビジョン策定について」

(岡田座長)

- 2010年に実施した「京都市伏見区久我・久我の杜・羽束師地域調査」の結果について説明。
- 将来的に懸念される課題として、宅地化予備地・転用待ちが点在していることや多くの住民や農家は秩序ある開発と農地の計画的保全を望んでいることが明らかとなった。
- 地区外土地所有者の農地が全体の4分の1を占めていることから、土地利用計画の話し合いの場をつくること自体が困難な状況であったが、京都市と伏見区役所の協力のもと、まちづくり協議会が設立された。

### (3) 施策提案に向けた検討

- ◎ 計画へ加えるのに適した内容や課題解決に向け取り組むべきこと等、自由な議論をお願いしたい。

- 政策立案において、京都の都市農業を今後どうしていきたいのか等、将来に向けたビジョンを作ると良い。ビジョンに基づき、現状の整理、様々な戦略戦法がある。基本的に地域コミュニティを強くするのが農業の役割。
- 教育と連携を考える際、地域に農業がある場合は、農業をベースに地域が子どもたちを育むという環境づくりが必要。その点で、京都は街の近くに農業があるため、取り組みやすいはず。
- 体験農園は、地域住民が参加できるようなイベントが開催されるなど、地域コミュニティの拠点となり得ることから、積極的に推進していきたい。また、生産した農作物は直売やお裾分けすることで、さらに地域になくてはならない存在になってくる。
- 以前、府も学童農園を推進していたが、教員の負担が大きく継続できていない。専任のスタッフがいて子供達、障害者、高齢者、一般の方にも園芸を教えられるようにできるといい。府内に約 200 名以上いる園芸福祉士との連携も考えられるのではないかな。
- 生産緑地における農地の貸借が可能となるが、農地を借りたい人が市町村に事業計画申請をする際に、積極的な支援が必要ではないか。
- 都市部の農業者から「点在農地が多い、進入路がない」等の相談の声あり。営農環境の整備のために基盤整備が必要であるが、都市部の農業は個別でやっているケースが多く、事業対象となりにくい。
- ◎ 基盤整備では、中山間地域を中心とした農業振興地域は国の補助事業の対象となるが、一方で都市的農業地域は活用できる補助事業が少なく、個別負担でやらざるを得ない上、宅地が入り組んでいる場合は工事すら困難。そのような場所では、ゴミが詰まったり、最近では集中豪雨による洪水という問題もある。今後府や市町村が共同で、ハード的な整備に要する財源を国に求めていくことが必要。
- ◇ コミュニティの拠点として体験農園は地域の核となるべき。市街化の中での農地政策を重点的に行ってほしい。市民によく見える状態の農園であるべきなので、行政からも情報発信等による周知をお願いしたい。
- 京都市でも、都市住民等に農業、土に触れてもらうことは非常に重要と考えていることから、市民農園の推進を基本計画に挙げている。一方で体験農園は非常によい取組ではあるが、園主の魅力に頼る部分が大きいいため、その点を行政が何かできないかと思案中。

- 食料自給率の高い国に少子化問題は少ないという意見を聞いたことがある。それが立証できれば、少子化や人口流失という課題の解決策として、農業体験、コミュニティ等の農業振興を（もっと）推進できるのではないか。
- 人口対策・少子化問題に関わる全国市長会の調査では、人口増加している都市の共通点は、「コミュニティ体制・安心の子育て環境がある」の回答が多かった。農業は、社会的な地域基盤をつくる場となり得るかもしれない。
- 北部地域を視野に入れた形で京都府の都市農業振興計画を作るためには、どういうことが必要か。例えば、振り売りは府北部や南部の地域では聞かず、直売所や無人の直売所である。そういう直売所文化は、直接消費者に販売をするという点で同じであるので、例えばそれを奨励・サポートしますというのも必要かもしれない。
- 振り売りの活動は、色々な方々と共同して関わりあい、理想のビジョンを掲げ、皆で協力について話し合い進めている。京都市には、振り売りという素晴らしい文化があるが、類似の関係性が他の地域でもあるはずであり、共感できることを紡ぎ合えばすぐ良いものができるのでは。
- 京都府は、都道府県庁所在都市の人口集中度が東京都 23 区の次に高い。それだけ京都市の市場規模が大きいと言える。北部と京都市あるいは南部と京都市を結ぶ、古くからある流れを現代において維持、再生すべき。
- 体験農園、市民農園もあるが、農家側としてはいかに農家を残していくかが一番大切である。農家として生き残るためにはある程度所得を上げることが必要であるが、基盤整備が都市近郊ではまだ十分にできていないところもあり、行政がサポートをしてほしい。
- 京都は、単位面積当たりの売上が大きい。ある地域では、2～3反の農地で三世代が営農している地域もあるほど、農業の基盤がしっかりとしている。そんな強みを持つ農業や農地を残してほしい。
- 農地を残すか農業を残すかという議論に繋がる。資料 4 は様々な内容が詰め込まれすぎて混在している印象なので、場合分けやパターン分けをして考えなければならない。たとえば、いわゆる上賀茂ですぐきを作っているような農家と都市で小さな水田を耕しながら細々とやっている農家を一律にした施策はあり得ない。
- これまでは、都市農業は 1 人で取り組むことが多かったが、グループ化することで資

材購入や機械の共同利用、販売・流通面などで得られるメリットも検討すべきかと考えている。

- 量販店と取引をするためには、一定のロット数が求められる。実際、地域で常に情報共有ができる仲間数人でグループを作って販売しているが、売上向上につながっている。
- 共同で農家レストランを行い、体験農園等があれば子供達もやってくる。さらにそのような取組が広がって6次産業を展開した人の繋がりができる、そういう夢をビジョンの中に書いてもらえると良い。
- 既にあるかもしれないが、農家の小さな問題に対応する相談窓口の設置やその支援を充実するなど、風通しの良い「便利な行政」としてのサービスが行き渡ればよくなるのではないか。
- 少子化問題の解決には、しっかりとした地域コミュニティが必要。京都で暮らす幸せを感じられるような事ができることのひとつとして、農業があるかもしれない。
- 街中の農地でできた野菜を学校給食で使用したり、子供レストランがあったり、週末に地域の人々のイベントがあったりと、遠くにいなくても農業があるというのが理想。

## まとめ

- 冒頭の話題提供の内容や「農業は社会的基盤をつくる産業である」等のコミュニティ関連の意見から、後半の議論につながった。その中で将来の京都府の都市農業ビジョンをつくっていくためには、大きな目標を定めた上で、個々の具体的な担い手、農地の保全・維持、都市農業交流の問題を見つけるような計画にすべきとの意見が多かった。また、より具体的な都市農家像に近いところで、農家の多様性も念頭に入れながら複線的にメニューを作っていく必要がある。
- 次回は、アクションプランのたたき台から、より計画としての具体像を明確化していく作業になる。